

日本の幼稚園における外国人保護者同士のネットワーク —外国人保護者へのインタビュー調査から—

The Network of the Foreign Mothers in a Kindergarten in Japan

相磯 友子

U幼稚園に子どもを通わせるフィリピン出身の母親3名にインタビュー調査を行ったところ、同じフィリピン出身の母親でもその子育て背景（日本人家族の有無、滞日期間、日本語力、出身国での子育て経験の有無、日本での子育て経験の有無、家庭内の言語）は多様であること、そのような多様な子育て背景をもつ外国人保護者同士の助け合いネットワークが存在することが示された。外国人保護者の子育て背景の多様さは、①入園時の子どもの日本語力、②入園時の心配、③入園後の子どもの変化の捉え方、④フィリピンの幼稚園と日本の幼稚園の違いの見方、に関係していることが示唆された。複数の外国人保護者が在籍する幼稚園における支援の方向として、①外国人保護者の子育て背景の多様さへの配慮、②外国人保護者同士の関係づくり・維持の援助、③外国人保護者が日本人保護者・幼稚園の先生と話しやすい関係づくりが考えられた。

キーワード：幼稚園、外国人保護者、外国人保護者同士のネットワーク、開いた関係

1. 背景と目的

幼稚園に在籍する外国人幼児数の増加に伴い、外国人幼児の保護者への支援についても求められるようになってきている（日本保育協会，2011；文部科学省，2013）。国際結婚家庭の子どもも増加しており（厚生労働省，人口動態調査）日本の幼稚園においても保護者が外国人であることが珍しくなくなっている。

しかし、外国人幼児の保護者を対象とした研究は非常に少ない。東京の保育所に子どもを預ける外国人の保護者のインタビューをまとめた大場（1998）は、外国人保護者は、基本的に日本の保育者を信頼している一方、保育所の要求に苦戦していることを指摘している。

日本の幼稚園に子どもを通わせる留学生家族の抱える問題を構造化して検討した佐藤・志村（2004）は、外国人保護者の問題として、日本語能力と日本の幼稚園についての知識・情報不足を挙げている。また、外国人保護者と保育者間の問題として、日本

語によるコミュニケーションと手紙の理解の困難さ、外国人保護者と保育者のコミュニケーション不足を挙げている。

保育所・幼稚園の連絡帳の記述から外国人保護者の課題を検討した富谷・内海・仁科（2012）は、園からのおたより、「園の文化」や「習慣」の理解の難しさを指摘している。

本稿では、先行研究で明らかになったような困難に対して外国人保護者はどのように対処しているのかに着目する。外国人幼児の保護者がどのように日本の幼稚園生活を過ごしているのか、外国人保護者へのインタビュー調査から検討することを目的とする。その上で、幼稚園における外国人支援について支援の方向を考察する。

2. 研究方法

本研究は、同じ私立幼稚園に在籍するフィリピン出身の保護者3名を対象として半構造化した質問によるグループ・インタビューを実施した。

インタビュー調査は2011年7月に実施し、インタビュー時間は45分であった。対象者は、私立U幼稚園に子どもを通わせているフィリピン出身の母親3名である。3名の母親のうちAさんとBさんは、日本語によるインタビューが可能であった。Cさんは日本語でのインタビューは難しかったため、筆者の日本語による質問を、Aさん、Bさんに随時通訳してもらった。インタビューは、協力者に許可を得てICレコーダに録音し、スクリプトを作成した。U幼稚園には調査時7名のフィリピン出身の保護者がいたが、幼稚園の先生を通してインタビューの依頼を行い承諾した3名の保護者にインタビューを行った。

3. フィリピン出身の母親の子育て背景の多様さ

インタビューから見てきたのは、フィリピン出身の母親達の子育て背景の多様さである（表1）。AさんとBさんの夫は日本人であり、Cさんはフィリピン人であった。日本語力もAさんとBさんに比べて、Cさんは日本語での会話は限定的であった。このような子育て背景の違いは、インタビューへの質問の回答の違いから見る事ができた。

(1) 入園時の子どもの日本語力

家族に日本人がいるかどうか、日本での生活期間などから、3名の子どもたちの入園時の子ども

の日本語力は異なっていた。Aさんの子どもは「パパが日本人」であることから、入園時に日本語を話すことができた。Bさんも、下の子どもは入園時に日本語を話すことができた。しかし、小学校3年生の長男はフィリピンの幼稚園を経て来日したため、今も日本語を話すのが難しく、コミュニティセンターで日本語の勉強をしている。Cさんの子どもは、幼稚園入園前にコミュニティセンターで日本語を少し学んだため、少しだけ日本語がわかる状態だった。

(2) 入園時に心配だったこと

Aさんは、上の子どもがU幼稚園の卒業生のため、U幼稚園に関して心配だったことはなかったものの、子どもが日本の子どもと合うかということは心配していた。

〈子どもが日本の子と合うか心配〉

A：子どもはお母さんと過ごすそう時間いっぱいあるから、ちょっと外人だから、日本人と外人、ちょっと性格が違うから、それで、子どもが入ると……大丈夫かなあ、合うかな、と。そういうふうになります。

【インタビューデータ1】

フィリピン出身の母親である自分と長い時間を過

表1 フィリピン出身の3名の母親の子育て背景

	Aさん	Bさん	Cさん
夫	日本人	日本人	フィリピン人
来日時期	2004年4月	1996年8月	2008年7月
家族構成	夫（日本人） 長男（小2） 長女（U幼稚園年長）	夫（日本人） 長男（小3） 長女（U幼稚園年少）	夫（フィリピン出身） 長男（小5） 次男（小5） 三男（U幼稚園年長）
日本語力	日本語で会話できる ひらがな、カタカナ、簡単な漢字は読める	日本語で会話できる ひらがな、カタカナは読める	日本語での会話は挨拶程度 ひらがな、カタカナは読める
出身国での子育て経験の有無	無し	有り	有り
出身国で子どもを幼稚園に入れた経験の有無	無し	有り	有り
日本で子どもを幼稚園に入れた経験の有無	有り	無し	無し
家庭内の言語	日本語	日本語	母→子：フィリピン語 子→母：日本語
帰国・定住の見通し	定住	定住	いずれは帰国

ごす子どもが、日本の子どもたちと合うかということ
を心配していることがわかる。

Bさんは、母親同士の集まりの会話が理解できる
か、幼稚園からのお便りやお知らせの文書が理解で
きるか心配していた。

〈母親同士の会話・漢字が理解できるか〉

B：例えば、お母さんたちの集まりではちょっと
難しい言葉もあるし、あと、何書いているかも
全然わからないし。漢字がね。ひらがなとカ
タカナだったら大丈夫だけど、漢字はちょっ
と難しいですね。

【インタビューデータ2】

来日間もなく幼稚園に子どもを入園させたCさん
は、全てが不安だったようである。また、子どもが
日本語を理解できるかについても心配していた。

〈幼稚園入園の全てが心配〉

筆者（以下、筆）：Cさん、心配だったことない
ですか？

C：いっぱい。

筆：いっぱい？

C：いっぱい、いっぱい。日本語わからない。

【インタビューデータ3】

Cさんは入園時に心配だったことはたくさんあっ
たこと、子どももCさん自身も日本語がわからない
状態であり、そのことを心配していたことがわかる。

日本の幼稚園に子どもを入れた経験があるかどう
か、また日本語力によって入園時に心配だったこと
に違いが見られた。

(3) 入園後の子どもの変化の捉え方

幼稚園に入園したあとの子どもの変化について、
Bさんは、子どものことばが成長したことを挙げて
いた。

〈子どもの日本語の上達の驚き〉

B：全然違う。あの、ことば。

筆：あー、そうですか。

B：全然違う。ペラペラなっちゃった。

筆：どのくらいで日本語が上手になったな一って
思いましたか？

B：そうですね。例えば、エレベーターのシャッ
ターとか、本当にびっくりした。エレベ
ーターのシャッターしまります、とか。

【インタビューデータ4】

Bさんは幼稚園に入園したことにより、子どもが
日本語が「ペラペラ」になったこと、また、シャッ
ターなど、語彙が増えたことを驚いている。

一方で、Cさんは、日本の幼稚園入園後の変化と
して、子どもがフィリピン語の敬語を使わなくなっ
たことを心配していた。

〈フィリピン語の敬語を忘れることへの心配〉

筆：フィリピン語で子どもが敬語で話すのが、で
きなくなった？

A：そうですね。忘れちゃったっていうか。

筆：忘れちゃった。なるほどね。

A：日本は、子どもはあまり使わないでしょうね。

筆：そうですね。

A：ですね？ですか？とか、年上の人と話をす
るんですね。それが、心配で。向こうのおじい
ちゃん、おばあちゃん、もうボは使わな
いって。フィリピン決まってるからね。子どもは
ボ使わないと怒るんですね。大人。

【インタビューデータ5】

Cさんの通訳をしてくれたAさんによると、フィ
リピンでは子どもは大人に対して「ボ」を付けて敬
語で話さなくてはいけないという。Cさんは、フィ
リピンの祖父母のもとに、1年に1回程度帰国して
いる。入園後、子どもたちの日本語が上達するに従
い、フィリピンで年上の人と話すときに敬語が使え
なくなっていることを心配していた。

Bさんが、幼稚園入園後の子どもの変化として、
日本語の上達を挙げているのに対して、Cさんは
フィリピン語の敬語を忘れつつあることを心配して
いる。このような入園後の子どもの変化の捉え方
は、日本の幼稚園に入園させた経験の有無、将来の
定住・帰国の見通しが関係していると思われる。B
さんは、子どもを日本の幼稚園に入れた経験がな

かったことから、下の子の日本語の上達を敏感に感じ取り、Cさん家族はいずれフィリピンに帰国するため、その時の子どもたちのフィリピン語を心配しているのだと思われる。

(4) フィリピンの幼稚園と日本の幼稚園の違いの見方

フィリピンの幼稚園に入園させた経験のあるBさんとCさんからフィリピンの幼稚園は学習が中心であることが語られた。

〈学習中心のフィリピンの幼稚園〉

B：フィリピンの幼稚園は、書ける。うちの子どももそう。3歳。3歳、あの……何だっけ英語で足す、引く。

筆：足し算、引き算？

B：はい。で、A、B、C、全部書ける。

筆：フィリピンの幼稚園は3歳から？

B：3歳、できる。だいたい勉強が多いですね。あの遊ぶより勉強の方が多。

筆：ああ、そう。

C：study

【インタビューデータ6】

フィリピンの幼稚園では、読み書きや足し算、引き算など学習が中心であり、毎日、宿題も多という。

一方で、日本で子育てを開始したAさんは、日本の幼稚園は学習中心ではないものの、生活の仕方を全部教えてくれるとして評価していた。

〈どうやって生活するかを全部教える日本の幼稚園〉

筆：日本の幼稚園は遊んでばかりと思いましたが？

A：遊んでっていうか。ま、全部教えてくれるんですけどね。どうやって生活するとか。フィリピンは、生活っていうか、勉強だけだから。

【インタビューデータ7】

〈フィリピンはフィリピン〉

A：日本にいるんだからそれに合わせて。フィリピンはフィリピン。別々。ま、同じじゃないからね。

【インタビューデータ8】

フィリピンの幼稚園と日本の幼稚園の違いの見方には、フィリピンの幼稚園に入園させたことがあるか、日本の幼稚園にどのくらい入園しているかが関係していると思われる。

インタビューデータ8からは、日本の幼稚園とフィリピンの幼稚園は別であり、同じでないが、日本に住んでいるのだからそれに合わせていくのだというAさんの考えが窺われた。

(5) 家庭で話す言葉

家庭で話す言葉を質問したところ、Aさんは「ほとんど日本語」Bさんは「だいたい日本語だけど子どもを怒るときはフィリピン語」Cさんは「お母さんはフィリピン語、子どもは日本語」だという。

〈子どもが迷うので日本語で話す〉

A：前は英語だけど、なんか、子どもは迷ってるから。なんか全然、日本語、英語とか、全然なんか話さないの。言ってるから子ども。ほとんどが日本語。

【インタビューデータ9】

Aさんは子どもが英語で話したらよいのか、日本語で話したらよいのか迷い、話さなくなってしまうことから、家庭では子どもが話しやすい日本語を話していた。

Bさんは、家庭の中で「たいだい日本語」であるものの、怒るときは日本語で話せないため、フィリピン語になるという。また、小学3年生の長男は、フィリピンの幼稚園を経験しているものの、フィリピン語がわからないという。

〈Cさんはフィリピン語で子どもたちは日本語で話す〉

筆：Cさん、おうちではフィリピン語ですか？

(AとB：英語とフィリピン語で通訳)

C：yeah yeah……

筆：何%日本語？

C：少し。

A：そう。お母さんたちは、話せる。子どもにフィリピン語で。でも、3人の子どもは日本語。

A・B・C：はははは。

筆：(笑) お母さんはフィリピン語。子どもは日本語。

A：そう。日本語。ははは (笑)

筆：それはお互い通じてる？

A：わかんない (笑) 何しゃべってるか、子どもが教えるから。

【インタビューデータ10】

Cさんの家庭ではCさんはフィリピン語で、3人の子どもたちは日本語で話していた。Cさんの家庭では、子どもたちの日本語が上達した結果、Cさんの日本語の通訳を子どもたちがしていた。

同じフィリピン出身の母親を持つ子どもでも、家庭で話される言葉が異なっていることがわかる。これは、家族に日本人がいるか、いずれフィリピンに帰るか、という背景が関わっていた。

4. フィリピン出身の母親同士の助け合い

U幼稚園のフィリピン出身の母親たちは幼稚園生活を乗り切るために助け合う姿が見られた。それは、フィリピン出身の母親同士のネットワークとも呼べるものであり、入園以前から知り合いだったこともインタビューから明らかになった。

(1) 幼稚園情報の入手

U幼稚園の情報をAさんはインターネットや日本人の夫から、BさんはAさんから、Cさんはコミュニティセンターの日本語教室の先生から得ていた。

AさんとBさんは、入園前から知り合いだった。知り合ったのは、ショッピングセンターでAさんが

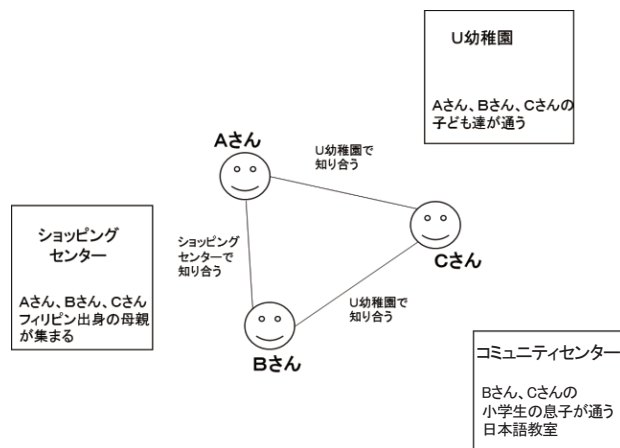


図1 フィリピン出身の母親同士の関係

「何か同じ国かなーと思って」声をかけたのがきっかけだったという。

Aさんの子どもがU幼稚園に在籍していることで、BさんはU幼稚園に入園することを決めていた。

〈わからないことがあったら聞ける〉

B：みんなここに通っているから。どうしようかな、ちょっと楽で。わからないことあったらみんなで。

C：うん、そうそうそう。

【インタビューデータ11】

Bさんは、Aさんや他のフィリピン出身の保護者がいることから、U幼稚園に入園すればわからないことがあったときにみんなに聞くことができると考え入園を決めていた。

最初にU幼稚園に入園したのはAさんである。その後、Cさんはコミュニティセンターの日本語教室の先生に紹介されて幼稚園を決め、Aさんに紹介されBさんがU幼稚園に子どもを入園させた(図1)。

U幼稚園にはインタビューを実施した時点で、フィリピン出身の保護者が7名在籍しているが、Aさんが「(U幼稚園) いいよ、おいで、おいで」と、声をかけ入園した保護者もいるという。

(2) 入園準備の伝達

Aさんは、上の子どもがU幼稚園に入園するときには、準備する物など初めてのためわからなかったという。しかし、幼稚園の販売会などで実物を見ることで、何を買い、どこに名前を書いたらよいかを知った。そして、それをBさんとCさんに教えていた。特に、入園時に日本語を理解することが難しかったCさんには「最初から教えた」という。

〈上の子の入園の経験から準備する物をBさんとCさんに教える〉

筆：何か準備するものとかあったでしょう？服とか。そういうのは心配なかったですか？何買ったらいいかはわかりました？

A：最初から入るときはね、それは心配ですけど、何もはじめてからわからないからね。

筆：お兄ちゃんのとさね。

A：うん。でも、だんだん慣れたから、それ大丈夫。

筆：Aさんわかったから、それをBさんとCさんに教える？

A：はい、そうですね。

筆：これとこれ買うんだよとか。

A：そうです。あと、幼稚園の、例えば、ものもつとかね。だいたいこれ、とか。名前どこに書くとか。みんなに販売しているときに、テーブルの上で色んな物が入ってて、それで見て、あー、だいたいこれくらいだな、とか。

【インタビューデータ12】

インタビューから、Aさんが最初にU幼稚園に上の子どもを入園させたときは、何を準備したらよいかのわからなかったことがわかる。しかし、販売会などで実物を見ることで何を準備したらよいかを知り、下の子どもの入園時には入園準備に慣れていた。Aさんは、その経験を生かし、BさんやCさんに入園時に準備する物を伝えていた。

(3) おたよりをローマ字に直して他の保護者へ

Bさん、Cさんはひらがな、カタカナは読めるものの漢字が読めないため、園からのお便りを読むのに苦労していた。

〈おたよりに漢字があるとわからない〉

B：外人だから、できればひらがなカタカナ、漢字まざってたら、どういう言葉、どういう意味かわからないから。で、もし、旦那さんに聞いても旦那さんも忙しいだから仕事で、なかなかちょっと時間が……ないですね。

【インタビューデータ13】

Bさんのインタビューから、ひらがな、カタカナは読めても、漢字が混ざっているとお便りを読むことができないことがわかる。また、日本人の夫に聞くと思ってても仕事で忙しく聞きにくい状況にあることがわかった。

そこで、簡単な漢字を読めるAさんが幼稚園のお便りをローマ字に直し、それをBさん、Cさんに渡していた。

〈毎月のおたよりをローマ字に直しBさんとCさんに渡す〉

A：1か月分のお知らせ？

筆：お便りありますね。

A：はい。ローマ字全部書いて。

筆：Aさんが全部ローマ字にする？

B：はい、そうです。私もお願いしていますよ。1か月分のお知らせ。

筆：はー、すごい。

A：ううん。私、ひらがな、漢字はちょっと読めるんですけど、わからないときはパパいつもいるから。それは相談して、何これ？って。

筆：でも、お便りをローマ字にするのどのくらいかかりますか時間？

A：どのくらいって、1時間半ぐらいね。3人いるから。

【インタビューデータ14】

Aさんは毎月のお便りをわかる漢字については自分で、わからない漢字は日本人の夫に確認しながら、3人分を1時間半かけてローマ字に直し、それをBさん、Cさんに渡していた。漢字を読むことができないBさん、Cさんにとって、Aさんがローマ字に直してくれたおたよりは重要な園の情報源になったと思われる。

(4) フィリピン出身の母親同士の関係そのものの楽しさ

フィリピン出身の母親同士のネットワークによる助け合いが見られたのは、フィリピン出身の母親同士の関係そのものが楽しく、ストレス発散できる関係となっていたからである。

〈毎日会って楽しいことを話す〉

筆：えっと、じゃ、フィリピンのお母さん同士で話す機会はありますか？

A：毎日あります。

筆：はははは。

A：外出たら、みんな集まって。

筆：どんなこと話してますか？

A：うーん、家のことですね。楽しいこと。

B：楽しいこと。

A：みんなだいたい笑って。ストレス、ストレス出す。

C：はははは（笑）

【インタビューデータ15】

インタビューから毎日のように母親同士で集まって話をしている様子がわかる。ショッピングセンターやU幼稚園の入園をきっかけとして知り合い、U幼稚園のお迎え時に園庭で話をしたり、ショッピングセンターで会って話をしたりしていた。また、BさんとCさんは、小学生の子どもたちを近所のコミュニティセンターの日本語教室に通わせており、そこでも顔を合わせている。このようにフィリピン出身の母親たちが集まる場が複数あることによって関係が深まっていた。また、その関係そのものが楽しく、ストレス発散の役割を果たしていると考えられる。

5. フィリピン出身の母親と日本人の保護者・幼稚園の先生との関係

U幼稚園のフィリピン出身の母親たちは、日本人の保護者や幼稚園の先生とどのような関係を築いているのだろうか。

(1) 日本人の保護者との関係

子どもの食事やお弁当の作り方では、日本人の保護者から情報を得ている様子が見られた。

〈子どもに野菜を食べさせるための日本人保護者の工夫に驚く〉

B：日本のお母さんは、すごいと思いますね。

筆：例えば、どんなところが？

B：あの、子どもの食べ物とかね。

筆：あー。

B：なんか、お話聞くと、すごいなお母さん、とかね。色んな、どうやって野菜食べさせるとか。子ども大変じゃん。野菜食べさせるのね。

筆：そうですね。

B：どうやってお料理食べられるのかな、とかね。

筆：うんうん。

B：例えば、ホットケーキとか、野菜混ぜて。うちもびっくりしたんです。持ってきたんです

よね。タッパーに入れて。野菜食べないから、こういうふうに、野菜入れて、食べさせるって。

【インタビューデータ16】

AさんとBさんによると、フィリピンでは、おかずは一つだけであり、子どもの食事にここまで気を使うことはないという。このように日本とフィリピンの食文化が異なる中で、幼稚園で週に数回持参しなくてはならないお弁当は、他の保護者のお弁当を見たり、本を参考にしたりして作っていた。

〈わからないときは、聞くと教えてくれる〉

筆：日本のお母さんたちと話すことってありますか？

B：うん、あります。

筆：どんなときに話しますか？

B：例えばね、わからないときは、先生の言うこと早いから。「すみません。あれ、何ですか？教えてください」って。ちゃんと。

筆：教えてくれる？

B：はい。あの、みんなが優しいから。

筆：聞きやすいですか？大丈夫ですか？

B：そう。

【インタビューデータ17】

〈わからないときには実物を見せてもらったり書いてもらう〉

B：（日本の保護者は）みんな優しいから、わからないことで聞いて、これどういう意味ですか？とか。見たり書いてもらいます。

【インタビューデータ18】

日本人の保護者には、先生の話でわからなかったことを聞いたり、どういう意味かをたずねたりしていた。それに対して、日本人の保護者は、実物を見せたり書いたりして説明していた。Bさんは、日本人保護者とわからないことがあったときには聞くことが出来る関係ができていた。

(2) 幼稚園の先生との関係

フィリピン出身の保護者と幼稚園の先生との間に

は、問題があるとき、困っているときに聞くことのできる関係ができていた。

〈Aさん：問題があれば話す / Bさん：困っているときに声をかける〉

筆：どのくらい、(先生と) 週何回とか話しますか？

A：うーん、問題あれば。問題なければほとんど話さないですけど。あれば、多分聞きたいことあるんですね。

筆：うん。

A：だいたい、1週間に1回かな。

筆：1回。

A：うん。

筆：うん。Bさんは？

B：困ってるときとか、子どもが風邪ひいてるとか、連絡とかね、わからない時とか、ちょっと聞いて……まあ、3回とか。先生も声かけます。もし何かあったら……

A：そうそう。

B：外で遊んで、で、先生来て、もし何かあったらあとで話して。

【インタビューデータ19】

AさんとBさんは問題があるとき、子どもが風邪を引くなど困っているときには先生に声をかけていた。また、両者ともに、U幼稚園の先生は自分たちに話しかけてくれること、また、何かあったら話してくれると述べていた。

このことから、AさんとBさんとU幼稚園の先生との間には、何かあったら話すことのできる関係ができていたと思われる。

〈Cさん：面談と困っているときに話す〉

筆：Cさんは担任の先生と話しますか？

(A：フィリピン語で通訳)

C：sometimes

A：たまに。

筆：たまに(笑)

A：面談で。あと困ってるときとか。

筆：なるほどね。話しやすいですか？先生に、聞きやすいですか？

B：はい。

A：うん。

筆：聞きやすい。

C：だいたいですね…… (小さい声で)

筆：大丈夫？

C：はい。外国人、ちょっと…… (曖昧に笑う)

【インタビューデータ20】

Cさんは、先生と話す機会は面談等で時々あるというものの、先生に聞きやすいかという筆者の質問に対して、小さな声で「だいたいですね……」と答え、「はい。外国人、ちょっと……」と曖昧に笑っている。Cさんへのインタビューは、通訳を通して行っていたため、筆者の質問が十分に伝わっていなかった可能性もある。Cさんと先生の面談は、AさんやBさんが通訳をしていた。しかし、それでも十分に質問が伝わっていなかったり、先生に話したいことを伝えられなかったりする可能性がある。

Cさんに対して筆者が幼稚園への要望を聞くと、Aさんを通して「ない」との返事であった。

〈先生、精一杯やっていますから〉

筆：(Cさんに対して)何か、こうしてほしいということありますか？幼稚園。

(A：英語で通訳)

A：ないって。

筆：本当に？

A：先生、精一杯までやっていますからね。

【インタビューデータ21】

インタビューから、AさんとCさんのどちらの意見かはわからないが、U幼稚園の先生方の精一杯な姿を認めていることがわかる。本インタビュー調査は、幼稚園を通して、協力を依頼したため、幼稚園への要望については、あったとしても答えにくかった可能性はある。しかし、それ以上に、先生の一生懸命な姿勢がフィリピン出身の保護者に伝わっているように思われた。

6. まとめ

(1) 外国人保護者の子育て背景の多様さ

本稿では、フィリピン出身の3名の母親へのイン

タビューを通して、3名ともフィリピン出身ではあるものの、その子育て背景は多様であることが示された。家族に日本人がいるかどうか、滞日期間、保護者の日本語力、出身国での子育て経験の有無、日本での子育て経験の有無、帰国・定住の見通しが、①入園児の子どもの日本語力、②入園時の心配、③入園後の子どもの変化の捉え方、④日本とフィリピンの幼稚園の違いの見方に影響していると考えられた。また、家庭内で使用する言葉も相手や場面によって多様であることが示された。

外国人保護者の子育て背景の多様さを理解することで、同じ国出身の保護者が幼稚園に対して異なる反応を示したときに、その要因を外国人保護者個人の問題とするのではなく、幼稚園と外国人保護者が共に解決策を考えることができるようになると思われる。また、外国人保護者の子育て背景が多様であるということは、そこで養育される外国人の子どもたちもまた多様であることを意味する。外国人保護者の子育て背景を理解することは、こういった外国人の子ども理解につながり、理解することで支援の方向が見えてくると思われる。

(2) 外国人保護者同士の助け合いネットワークの背景

多様な背景を持つ外国人保護者であるが、その間には、幼稚園生活を乗り切るための助け合いネットワークともいべきものが存在した。このような助け合いネットワークの背景として、3つのことが考えられる。1つ目は、幼稚園入園前から、外国人保護者同士のネットワークがあったことである。また、幼稚園のお迎えの時に毎日幼稚園で顔を合わせることができ、同じ日本語教室に子どもを通わせていること、外国人保護者が気軽に集まることのできるショッピングセンターなど、ネットワーク関係が維持できる「場」があったことである。

2つ目は、外国人保護者同士の助け合いネットワークを築きつつも、外国人保護者だけで固まって、他からの情報が入らないような閉じた関係ではなく、日本人の保護者、幼稚園の先生とわからないことがあったら聞くことが出来、困ったときには相談できる、開いた関係があったことである。これは、U幼稚園の先生が①外国人保護者に自分から話

しかけることを心がけ、困ったことがあったら相談してもらえ、関係を意識的に築いていたこと、②英語の得意な日本人保護者に通訳を頼むなど、日本人の保護者と外国人保護者をつなげていたことも大きいと思われる(相磯, 2013)。

3つ目は、外国人保護者同士の助け合いネットワークそのものが楽しく、ストレスを発散することのできるものであったことである。このことにより外国人保護者同士の助け合いネットワークが維持されていたと思われる。

7. 支援の方向

以上のことから、3つの支援の方向が考えられた。

(1) 外国人保護者の子育て背景の多様さへの配慮

外国人保護者の子育て背景が多様であることを配慮した支援の方向である。具体的には、日本での子育て経験のない保護者や、日本語での会話が限定的な保護者に対する入園オリエンテーションの充実が挙げられる。この時に、先輩外国人保護者に立ち会ってもらうなど、外国人保護者の視点から、日本の幼稚園の文化、習慣、準備する物等について説明してもらう方法もある。このことをきっかけに、先輩外国人保護者と入園の早い段階で出会いの場となる可能性がある。次に、園からのおたよりにふりがなをつけることである。園からのおたよりの漢字にふりがなをつけるだけでも、外国人保護者が得られる園の情報は増加する。また、ふりがなをつけることによって、外国人保護者自身がインターネット等で意味を調べることができる。最後に、日本語での会話が限定的な保護者と時間をかけてコミュニケーションをとることである。日本語での会話のできる外国人保護者に通訳になってもらうだけでなく、保育者が直接外国人保護者に簡単な日本語で話しかけ続けることで、会話の意味内容は伝わらなくとも、何か困ったときにはこの人に相談すればよいのだ、ということは伝わると思われる。

(2) 外国人保護者同士の関係作り・維持の援助

幼稚園における外国人保護者同士は出会う機会は設けるが、無理強いをせずに、その関係に注意を払うことが大事であると思われる。先輩保護者が負担

に感じていないか、それぞれの関係に注意を払いながらも、外国人保護者同士が相互に助け合えるような関係作りへの援助が重要と思われる。また、外国人保護者同士の関係維持の「場」をできるだけ把握し、来日間もない外国人保護者に対しては、コミュニティセンター等における日本語教室を紹介することで、外国人保護者同士の関係づくりを援助することもできよう。

(3) 外国人保護者が日本人保護者・幼稚園の先生と話しやすい関係づくり

外国人保護者同士のネットワークは日本人の保護者や幼稚園の先生とも困ったときに聞いたり相談したりできる、開いたネットワークであることが大事であると思われる。そこで、U幼稚園の先生の身振り手振りで、時には電子辞書片手に「まずは私から話しかけます」という姿勢（相磯，2013）から学ぶことは大きいと思われる。

謝辞

お忙しい中インタビュー調査にご協力下さいました保護者の方々、保護者との日程を調整してくださ

いましたU幼稚園の先生方に感謝致します。

本研究は、平成22～23年度植草学園大学共同研究「インクルーシブ保育の充実をもたらす促進要因に関する実際研究」（代表：太田俊己）による助成を受けました。

参考文献

- 1) 日本保育協会，2011，保育の国際化に関する調査研究報告書
- 2) 文部科学省，2013，学校基本調査
- 3) 厚生労働省，各年，人口動態調査
- 4) 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子，外国人の子どもの保育—親たちの要望と保育者の対応の実態—，萌文書林
- 5) 佐藤千瀬・志村洋子，2004，日本の幼稚園に子どもを通わせる留学生家族の抱える問題，留学生教育，6，43-58.
- 6) 富谷玲子・内海由美子・仁科浩美，2012，子育て場面で外国人保護者が直面する書き言葉の課題—保育園・幼稚園児の保護者を対象とした調査から—，神奈川大学言語研究，34，53-71.
- 7) 相磯友子，2013，幼稚園における担任教諭の外国人の子どもへの支援—担任教諭へのインタビュー調査から—，植草学園短期大学紀要，45-53.